上郡町の偉人
大鳥圭介 第二十三回「真摯の人」

著者 中川由香

清国朝鮮国駐剳公使の圭介は日清戦争の火蓋を切ったとされる。圭介は「清国の事情に精通する極めて練達の士」と認識され、外交キャリアは無いものの、多事多難な清の公使として抜擢されていた。

明治二十二年十一月、圭介は北京に赴任する。老中国と言われ戦前日中外交を担った船津辰一郎が、少年期に圭介の小姓だった。船津少年は大工の息子で、刻苦励精の末に名を成した圭介を非常に尊敬した。圭介の質素勤倹に従い、靴下の修繕など細々働いた。時に圭介の按摩をし故郷の父母を思った。少年は後年も、圭介の如楓家訓を実行したという。

圭介は天津に工学士の桑原政が派遣されると聞き「欣喜に堪えず、多年の望、漸く達したる」と喜んだ。桑原は工部大学校卒、ダイハツ創設者である。圭介の本望は、日本の殖産興業の経験を活用して当地の工業開発を支援することだった。日本は既に上級技術者達が育ち、自立した産業を発達させていた。日本の産業最前線を後進に託した圭介は、産業未発達国で自分の力を尽くすことが宿願だった。

圭介は清国を「実に天下の盃友」と述べた。圭介は清国人に敬意と礼節を持ち接した。特に清国重臣の李鴻章大使には誕生日に漢詩を送り「君独り詩あり」と喜ばれた。また多忙の合間に、万里の長城を訪問。その旅行記「長城游記」に和歌や漢詩、スケッチを挿入し、中国歴史地理教養と豊かな旅情を込めた。貴重な当時の中国紀行史料である。

圭介は一時帰国した後、明治二十六年九月、駐韓公使を兼ね朝鮮京城へ到着した。この時東学党の乱発生、朝鮮から清国へ援兵依頼が為された。圭介の帰任時、日本の関与を拒む清からの武力攻撃が予想された。この時見送った外務大臣陸奥宗光に「今後は生還を期せない」と伝えた。陸奥は「君が死ねば僕が骨を拾う」と返した。圭介に死の覚悟があった。

圭介は、清を宗主国とする朝鮮に強引な改革を要求したというのが通説である。しかしその内容は、外国交渉重視と担当大臣の設置、冗長な人員のリストラ、格や家柄を問わぬ人材登用、官吏収賄の禁止、売官悪弊の停廃、国家収支の監査と厳正な会計出納、不必要な支出の削減、土地田畑の調査と租税の改正、税関での他国の不干渉、鉄道電信の開設、裁判法改正と公正な司法、士官養成と兵式改革、厳正な警察の設置、各地方の小学校設置と中学・大学設立、優秀人材の外国留学など。一国が国として主権を持ち国際社会に認められる為の至極当然な事項だった。当時の清の属国である朝鮮においては非現実的とされるが、圭介が朝鮮独立を誠意を以って推進した証であろう。当時の旅行家イザベラ・バードは「朝鮮紀行」で「改革法令は日本公使が主導したもので、日本は朝鮮式機構の複雑多岐な悪弊と取り組み、是正しようとした」と述べる。また「大鳥氏は官報を活版印刷で発行する有益な刷新を行った。漢字と『無知な文字』とされていたハングルの混合体が官報に用いられ、一般庶民にも読めるようになった」とバードは記す。圭介は朝鮮固有の文字ハングルを普及させるきっかけを供した。一部の知識階級だけでなく庶民も文字を読めることは、朝鮮の民の知識度、民力の向上に直接寄与する。

公使が朝鮮に清の従属関係を断つ要求を行なった事が、開戦の契機とされる。日本政府は平和主義の方針だったが「時局急促する時は公使が臨機処分を施すこと」ともされ、圭介は苦悩した。二十七年七月、クーデターを起こした朝鮮大院君と金弘集政権が、日本に対し清軍掃討を依頼。日清戦争が勃発した。甲午改革で朝鮮近代化を図った金弘集は、日本で圭介と親しく時に自宅に招かれた人物だった。「皇御国を代表し 万里の翼を鶏林の 天に奮へる大鳥の 公使の誉は世に高し」日清開戦で圭介の名は上がった。しかし、朝鮮改革に心を砕きつつ友誼を深めた清と開戦せざるを得なかった圭介の心情はいかばかりか。日清戦争講和の下関条約の際、李鴻章から圭介に友誼を謝して臥龍梅が贈られた。これは国府津の圭介別荘に植えられた。その友情を伝えるように、梅は今も花咲いている。

国府津の臥龍梅